

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 5 月 31 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K03172

研究課題名(和文)シベリアに抑留された満洲の女たちに関する社会史的・ジェンダー史的研究

研究課題名(英文)Siberian Detainees from Manchuria: Socio-Historical and Gender Approaches

研究代表者

生田 美智子 (Ikuta, Michiko)

大阪大学・言語文化研究科(言語社会専攻、日本語・日本文化専攻)・名誉教授

研究者番号：40304068

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：シベリアの抑留者の中に女性がいたことは従来知られていなかった。抑留体験者に取材したジャーナリストに証言の信憑性について取材を受けた機会に、彼の紹介で当時健在だった女性抑留者に取材した。また、モスクワの軍事公文書館でハバロフスク地方から他の収容地区への移動リストを発見することが出来たが、その多くは従来取材を続けてきた女性であり、証言の信憑性を確認することができた。また、ハバロフスク地方で収容所跡を調査し、目撃者にインタビューした。上記の調査結果を雑誌「セーヴェル」に連載し、日露学術シンポジウムや国際研究大会で報告した。また、滋賀県平和祈念館、大阪府北野高等学校の戦争シンポジウムで報告した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

女性シベリア抑留者に取材し、モスクワの軍事公文書館で発見した移動名簿やハバロフスクで取材した目撃者情報と照らし合わせ、引揚までの移動・分散を跡づけた。研究成果は雑誌「セーヴェル」に連載した。彼女たちが満洲から抑留された事実に着目し、女性の社会進出、引揚以降の差別も問題も考察し、『満洲からシベリアへー女性たちの日ソ戦争』と題して2022年に公刊した。

女性のシベリア抑留の事実は引き揚げ当初は多くのマスコミに大々的に取り上げられたが、現在では忘れさられ、男性抑留者でもその事実を知らない人が多い。

従来知られていなかった事実を発掘し、交換したことの学術的意義ならびに社会的意義はおおきい。

研究成果の概要(英文)：Until recently, little has been known about the existence of women among Siberian detainees. I have especially recognized the necessity of the research on this topic when one journalist asked me whether there were any testimonies about female detainees and whether they were reliable. Having begun the research, I interviewed dozens of women. Moreover, in the Moscow Military Archive I found lists of women who were transferred from Khabarovsk Region to other camps and all of them confirmed the credibility of their testimonies. In Khabarovsk, I found the ruins of former camps and interviewed several witnesses. The results of my surveys were published in five numbers of the journal "Sever". I have also organized a panel "Detention Organizations Study" at a conference I have also made presentations at Russian-Japanese Academic Symposium in Khabarovsk and various other conferences, including the one at Shiga Peace Memorial Hall and Osaka Prefectural Kitano High School War Symposium.

研究分野：日露・日ソ交流史

キーワード：シベリア抑留 ジェンダー 女性の戦争動員 日ソ戦争 東西冷戦 戦場の性暴力 特別病院 引き揚げ

1. 研究開始当初の背景

シベリア抑留とは1945年8月日ソ中立条約を破って対日対戦したソ連軍により満洲や樺太にいた日本人がソ連・モンゴルに抑留され、数年間、長い場合は10年間も強制労働につかされたことをいう。抑留者によると、満洲にいたという侵略戦争に加担したとみなされ、ソ連が知識人の希望の星であった時代には信じてもらえなかったという。加えて、シベリア抑留は政治問題になりやすく、学問研究の対象になりにくかった。

理不尽な扱いを受けた抑留者の無念の思いは、多くの回想記などで語り継がれてきた。しかし、その中に女性がいたことは、女性抑留者自身が沈黙していたこともあり、ほとんど知られていなかった。このように、女性のシベリア抑留は、長い間存在しないテーマであった。

ソ連末期になりベレストロイカで史料公開がすすむと抑留研究が着手されるようになる。その中で最初に女性抑留者に言及したのは軍事史家のガリツキーであった。彼は1991年の段階で女性抑留者の人数に関する史料を発見したが、男女混合の史料だったので、そこから女性抑留者を選び分けるのは困難だと判断し、それ以上先に進まなかった。以来、女性抑留者に関する研究はロシアでは今に至るもみられない。

日本でもシベリアに抑留された女性の存在は内輪のコミュニティ、すなわち、抑留関係者やその親睦団体以外ではほとんど知られていなかった。日本で女性抑留者の存在に最初に触れたのは1979年、若槻泰雄の『シベリア捕虜収容所』サイマル出版会であった。しかし、テーマとして女性の抑留をとりあげたのは、2016年、雑誌『セーヴェル』で富田武が長期抑留者中村百合子を、生田美智子が短期抑留者を取り上げたのが最初であった。

2. 研究の目的

女性のシベリア抑留研究が作動するきっかけとなったのは、2013年、女性抑留者に取材した新聞記者から話の信憑性に関する問い合わせであった。その取材に同行して以来、知己となった女性抑留者の紹介で連鎖的に多くの女性抑留者に取材することができるようになり、彼女たちの体験が男性抑留者のシベリア三重苦、すなわち、「飢え、極寒、重労働」に象徴される経験とは異なる別の女性ならではの体験をしていることに気づき、女性抑留者問題を本格的に研究しなければならぬと考えるに至った。さらに、同一収容所にいた抑留体験でもその質や光景が男性とは異なって捉えられていることに気づいた。

その一方で、従来知られていた女性の体験談の多くが満洲に侵攻してきたソ連兵による女性への性暴力などに集中し、しかもソ連兵の粗暴さのみで説明されていることに疑問をいだき、さらに、ソ連の対日参戦が当時の日本の植民地政策や当時の世界の動きに関連づけることなく、二国間関係に収斂させて語られがちなものにも気づき、タイムスパンを長くとり、300年におよぶ日露・日ソ関係全体の中で一望し、その関係をジェンダーの視点から照射し解明することを目的とした。

3. 研究の方法

存命の女性抑留者に取材してできるだけ多くの証言を集めた。さらに、ジェンダーによる差異をあぶり出すために、同一収容所に入れられた男女の体験談を集め、その語りを比較した。また、体験者の証言を文書館史料で裏付けるべくモスクワの軍事公文書館で調査を続けた。その過程で2018年、ハバロフスク収容地区からピロビジャン、チョープロエ・オゼロ、ライチ

八、ペレヤスラフカ、ホール、ブラゴヴェシチェンスクの収容所や特別病院への女性たちの移動名簿を発見することができた。名簿に掲載されている人名の多くが従来から取材を続けてきた元佳木斯第一陸軍病院所属の日赤看護婦、陸軍看護婦、看護学生、女子挺身隊であったので、帰国後女性抑留者本人に再度取材し、さらに証言の裏付けを取るべく、旧満洲やロシアに調査にでかけ、存命の目撃者を捜し出し、取材した。

同年、シベリア抑留体験者の横山周導氏が主宰する「シベリア出兵 100 年、イワノフカ村・アムール州・ハバロフスク慰霊の旅」に参加し、当時を知るロシア人や日本人研究者と交流し、知見を深めた。

4．研究成果

研究成果の社会への還元に関しては、2017 年、シベリア抑留研究会第 35 回例会で「佳木斯第一陸軍病院看護婦たちの抑留」と題し報告し、2018 年、シベリア抑留研究会第 49 回例会で「抑留された女たち 満洲からシベリアへ」と題して報告した。2019 年、第 10 回スラブ・ユーラシア研究東アジア大会では「女たちと戦争 動員、抑留、記憶」と題したパネルを組織し、報告した。同年、ハバロフスクで開催された日露学術シンポジウムでは「新たに発見した文書 女たちのシベリア抑留の解明にむけて」と題して報告した。同年、10 月と 11 月に滋賀県平和祈念会館で「はじまりは満洲だった」と「女たちのシベリア抑留」と題して連続講演した。聴衆の中に抑留体験者の参加があり、知見を広めることができ、有益であった。

11 月、こうした口頭報告や講演に加え、「終わらない戦争 シベリア抑留」と題した論文を雑誌セーヴェルに 5 回にわたり連載した。ロシア語では 2019 年『エセーニン記念リヤザン大学学报』第 62 号に「もう一つのシベリア抑留 女性を中心に」と題した論文を公刊し、ロシア科学アカデミー民族誌学・人類学研究所発行の『家族と社会の民族誌と人類学から見たジェンダー』の単行本で「もう一つのシベリア抑留 女性を中心に」と題した論文を公刊した。コロナ禍が蔓延してからは調査に出かけることが出来なくなったが、テープおこしや電話や手紙での取材を続けた。

2022 年、既発表の論文、ならびに、テープおこしや電話・手紙による取材をまとめて、『満洲からシベリア抑留へ 女性たちの日ソ戦争』（408 頁）と題した本を人文書院から公刊した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 6件/うち国際共著 3件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 生田美智子	4. 巻 62
2. 論文標題 日本人女性捕虜が見た日ソ戦争直後のハバロフスク	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 エセーニン記念リャザン大学学報	6. 最初と最後の頁 7-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する
1. 著者名 生田美智子	4. 巻 36
2. 論文標題 終わらない戦争（5） - 女たちの分散・移動	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 セーヴェル	6. 最初と最後の頁 16 - 31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する
1. 著者名 生田 美智子	4. 巻 2巻
2. 論文標題 -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 XIV-XXI	6. 最初と最後の頁 84 - 88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する
1. 著者名 クラノフ・アレクサンドル著・生田美智子訳	4. 巻 102
2. 論文標題 慶応義塾生ロマン・キムの運命の分水嶺としてのロシア革命	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 ロシア史研究	6. 最初と最後の頁 81 - 95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 生田美智子	4. 巻 第53巻第3号
2. 論文標題 もう一つのシベリア抑留－女たちのシベリア抑留－	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 軍事史学	6. 最初と最後の頁 51 - 75頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 生田美智子	4. 巻 34
2. 論文標題 終わらない戦争・シベリア抑留(3)－女たちの移送・収容－	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 セーヴェル	6. 最初と最後の頁 126 - 143頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 5件）

1. 発表者名 生田美智子
2. 発表標題 忘れ去られた女たちのシベリア抑留
3. 学会等名 第10回スラブ・ユーラシア研究東アジア学会（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 生田美智子
2. 発表標題 新たに発見された文書：女たちのシベリア抑留の解明に向けて
3. 学会等名 第35回日露極東シンポジウム（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 生田 美智子
2. 発表標題 日本人女性抑留者のみた日ソ戦争後のハバロフスク
3. 学会等名 ロシア女性誌学会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 生田 美智子
2. 発表標題 満洲からシベリアへ：看護婦たちのシベリア抑留
3. 学会等名 大阪経済法科大学アジア太平洋センター市民アカデミア（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 生田美智子
2. 発表標題 非常時を生きる女たち：占領地と収容所の日常
3. 学会等名 大阪大学国際シンポジウム（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 生田美智子
2. 発表標題 抑留された女たち－満洲からシベリアへ
3. 学会等名 第33回日口学術シンポジウム（国際学会）
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 生田美智子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 人文書院	5. 総ページ数 400
3. 書名 女たちのシベリア抑留	

1. 著者名 ムヒナ、ペロバ、生田美智子ほか	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ロシア科学アカデミー民族学人類学研究所	5. 総ページ数 331
3. 書名 家族と社会の民族誌と人類学からみたジェンダー	

1. 著者名 Michiko Ikuta (Streltsov D. and Shimotomai N. ed.)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Brill	5. 総ページ数 650
3. 書名 A History of Russo-Japanese Relations	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 非常時における女たち：戦争・動員・抑留・戦後	開催年 2018年～2018年
----------------------------------	--------------------

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------